中國詩文論叢　第十九集

『和漢朗詠集』所收注釋補訂（十二）

――付・菅野禮行『和漢朗詠集』譯注質疑――

植木久行

●二二三番　白居易「暮に立つ」「大底四時心惣苦、就中腸斷是秋天」

○元和九年（八一四）の秋、作者四十三歳、華州下邽縣義津鄉に屬する金氏村（四十軒あまりの村、通稱「渭村」。部長安の東北約七十キロ）での作（花房・朱）。元和六年四月三日、母親が都長安で歿すると、白居易はただちにこの金氏村に退居して喪に服し、元和八年の夏、三年の喪を終えた。しかしその後一年以上過ぎても、京官に復歸できなかった。これは、左拾遺・翰林學士在任中の、政治や社會に對する辛辣な批判がたたり、宰相李吉甫を中心とする當時の政界事情が彼の復歸をはばんでいたらしい。[1] 一緒に喪に服していた弟の行簡は、本詩の作成される直前の五、六月ごろ、劍南東川節度使盧擔の幕僚となって金氏村を去っている。本詩は、なかなか復官できない不安と焦躁のなかでの作。本詩の起句に、「黄昏獨り立つ　佛堂の前」とある。若くして夫を失い、白家の苦しい生活の犠牲となって死んだ母親と、下邽に退居した年に夭折した最愛の一人娘、金鑾を追憶する悲しみが、本詩の底流をなしていよう。

渡邊信一郎「白居易の慙愧―唐宋變革期における農業構造の發展と下級官人層―」[2] は、白詩を踏まえてこういう。「白居易の家は、この金氏村の南端にあった。その門は、渭水の蔡渡の渡し場（渭水の南岸）に面し、渭水へは一五〇mほどの距離にあった。そこから南方やや東よりに眼を轉ずれば、更に華山の連峰が見わたせるであろう。この門のまわりに楡・柳・槐・桃・桑・椹などの木立を配し、その中に茅ぶき五、六間の家屋が營まれている。木立に圍まれ、のちに二十間に增築

される草堂は、金氏村にあっては、やはり人目をひくものであったであろう」と。

前掲起句の「佛堂」は未詳。金氏村内の佛堂（佛像を安置する建物）付近を散策しての作か。書陵部本『朗詠抄』には、「遊覽ノ詩也」という。白居易の詩（『代書詩一百韻、寄微之』〔巻13〕）の原注に、「開元觀（都長安城内の道徳坊にあった道觀）の西北の院は、卽ち隋の時の龍村の佛堂なり。古柏一株有りて、今に至るまで存す」と見える用例も、參考になろう。石川忠久『NHK漢詩をよむ　白樂天』[4]には、「ある寺に遊んで作ったもの」という。

ちなみに、下邽の白居易宅に關しては、『大清（嘉慶重修）一統志』巻二二八、西安府二、古蹟の條に、「渭南縣の東北に在り。……『縣志』に、宅は故の下邽縣の東の紫蘭村に在り。樂天の南園有りて、宅の南に在り。金の時に至りて、石氏の園と爲る」という。文中の紫蘭村の名は、現在すでに失われた。左忠誠「白居易故宅考釋」（『文博』一九八五年四期）は、渭河の南遷や墓誌・地志などを總合的に考えて、白居易の住んだ「渭村」（金氏村）の位置を、渭南市（渭河の兩岸の地を含む）上太莊村[5]の西南、周圍一萬平方メートルの範圍内に比定する。當地は、現在の渭南市區の東北約十二キロ、渭水の北岸の地[6]である。

○〔大底〕　宋版『白氏文集』以下、「大抵」に作るが、大底と大抵は通用する。平岡・今井編『索引』によれば、大底は二例、大抵は本例を含めて六例を數える。宇野明霞（もと釋大典）撰『詩語解』巻下には、「大抵・大底、竝に概括（スベックル）なり」とあり、宇野明霞原撰・釋大典刪補『詩家推敲』巻下に、大抵・大都は、ともに「概括シテイフ辭」とあるように、およそ、要するにの意。王鍈『詩詞曲語辭例釋』（增訂本）も、推測を表す通常の「大致」「大約」とは異なる、「總之」（要するに、つまり）の用法を指摘する。白詩「桃杏を種う」（巻18）の、「海角と天涯とを論ずる無く、大抵心安ければ　卽ち是れ家」などは、上句を受けて總括する大抵（大底）の用法をよく示す例である。この意味で、おおよそ（西村富美子『白樂天』）、おおむね（岡村『文集』三）、大體において（菅野禮行『和漢朗詠集』[7]）など、誤解されやすい口語譯は避けて、「およそ」（川口文庫本）などと譯すべきであろう。古訓「おほむね」「おほよそ」も、總じて、およその意である。

○〔四時〕　春夏秋冬のこと。四季・四序とほぼ同意。[8]

○〔惣〕　宋版・那波本には「揔」に作るが、いずれも「總」

と通用する。太田辰夫『中國語歴史文法』[9]には、總を「あつめる、つかねる、すべるなどの意からすべて、みなの意に轉じたもの。副詞として用いられた例は晉の頃から見える」として、陶潛「子を責む」詩を引く。ちなみに、轉句は本來、「大底四時惣心苦」とあるべきところを、平仄の關係から惣と心を轉倒したものであろう。つまり「四時惣て」の意。

○〔苦〕　悲傷・愁苦の意。深く胸をゆさぶる意としても捉えられる。國會圖書館本『和漢朗詠注』には、「苦者、感也」としていう、「四季ハ何レモ感多ケレトモ、秋ハ、草木黄落シテ、盛者必衰ノ色ヲ示ス故ニ、腸タヲ斷ト云也」と。

○〔就中〕　舊訓は「コノウチ」「コノナカ」、現在は一般に「ナカンヅク」と訓む。ただし『六注』は「中ニ就イテ」と訓む。『詩家推敲』卷下に、「其中ノ最ナル所ヲイフ語」とあるように、「その中にて最も」（柿村『考證』）、「なかでもひときわ」（川口）などの意。王鍈『詩詞曲語辭例釋』は、就中の用法を、①範圍を表す「其中」、②場所を表す「其間」（そこ、そのあたり）、③時間を表す「其時」の三つに分けて考察する。[10]ここは、もちろん①の用例。より古くは、北周の庾信「春日極飲」詩に、「就中言不醉、紅袖捧金杯」とあり、唐代に入って多用された。白詩の用例は、本詩を含めて十四例を數える。その一つ、「西湖留別」詩（卷23、後集卷5）にいう、「處處　頭を廻らせば　盡く戀ふ堪きも、就中　別れ難きは　是れ湖の邊り」と。ちなみに、中唐の劉言史「故友于君の集を讀む」詩には、「大底從頭總是悲、就中偏愴『築城詞』」とあって、本詩と同樣に、大底と就中が對をなす。

○〔腸斷〕　「斷腸」と同意。平仄の關係で轉倒。白詩には、本例を含めて十二例あり、「夜雨に鈴を聞けば　腸斷の聲」（「長恨歌」）のように、音聲に關して用いられることが多い。ここでは、承句の「滿地の槐花　滿樹の蟬」を受けて、視覺と聽覺の兩面にわたる。中原健二「唐詩における〝斷腸〟――讀詞のための覺え書き――」[12]は、斷腸の語と季節との結びつきを檢討して、こういう（要約）――六朝詩以前の〝斷腸〟（腸斷を含む）は、秋という季節のなかでの悲哀、それも羈旅や別離、死などの嚴しい狀況のなかでの悲哀を表す言葉であったが、中唐以後、特に晩唐期になると、春という溫柔な感覺に包まれたなかでの憂愁や悲哀を取りこんだ詩語となり、數量的にも春に多用された。これは、中唐以降、特に晩唐期、傷春・惜春・惜花といった、春やその景物によって喚起された心情を〝斷腸〟で表現することが多くなるためである。換言すれば、春は斷腸を喚起するにふさわしい季節だという詩

的認識が成立したことを推測させる。ところが逆に、〝斷腸〟と悲秋といった感情を密接に結びつけた唐詩の用例はほとんどなく、白居易の「暮立」詩のそれが、例外としてあげられるぐらいであろう、と。興味深い指摘である。やはり本詩には肉親の死を追悼する悲しみが底流し、それゆえの例外的な用例なのであろう。なお詩語「斷腸」の成立については、松浦友久「『斷腸』考―詩語と歌語Ⅲ―」[13]参照。

○〔是〕　主語と述語を結んで、両者が同じ、もしくは同格のものであることを表示する動詞（同動詞）、すなわち「繫辭」（系詞）としての用法であり、「AはBである」という判斷句を形成する。

○〔秋天〕　ここは白話的用法で、單に「秋」の意。「秋の空」（柿村『考證』、大曽根注など）ではない。しかも「天」字は韻字として用いられている[14]点にも注意したい。一説に、「秋の時節」（天は時節の意）とする。松尾良樹「唐代の語彙における文白異同」[15]は、白話としての白詩の用例を、本例以外にもう一つ、「嵩陽觀にて夜　霓裳を奏す」詩（巻27、後集巻11）の、「開元の遺曲は　自ら凄涼、況んや秋天に近く　調べ是れ商なるをや」を指摘する（訓讀は引用者）。また松尾論文が指摘する白話「春天」の用例、「吳苑　四時　風景好きも、就中　偏へに好きは　是れ春天」（「早春　蘇州を憶ひて　夢得に寄す」）は、本詩の句型・發想と類似する。天が韻字である点も同じである。その原文をあげておく。「吳苑四時風景好、就中偏好是春天」（巻31、後集巻12）。

●二三〇番　白居易「李十一の東亭に題す」「相思夕上松臺立、蛬思蟬聲滿耳秋」

○元和三年（八〇八）の秋、作者三十七歳、都長安での作、左拾遺・翰林學士在任（朱『箋校』）。一説に貞元十六年（八〇〇）～貞元十七年の作ともされる（花房）が、誤りであろう。詩題の「李十一」は、白居易の親友、李建（字は杓直）を指し、十一は彼の排行[16]（祖父・曽祖父を同じくする一族間における、同世代の男たちの出生順序）である。また本詩の後半（轉結句）に、「惆悵す　東亭　風月の好きを、主人　今夜　鄜州に在り」という。岑仲勉「論『白氏長慶集』源流并評東洋本『白集』」[17]（一八）の（丁）發微）は、この點を考慮に入れつつ、元稹の「唐故中大夫・尚書刑部侍郎・上柱國・隴西縣開國男・贈工部尚書　李公（建）墓誌銘」（冀勤點校本『元稹集』巻五四）[18]の、

會朝廷以觀察防禦事授路恕治於鄜、恕卽日就公（李建）

『和漢朗詠集』所收注釋補訂（十二）（植木）

求自貳、降拜六而後許。詔賜五品服、供奉殿中以貳焉。會恕復取不宜爲賓者、公罷去、歸爲殿中侍御史。

の記事[19]と、路恕が元和三年二月、鄜州刺史・鄜坊節度使に任ぜられたこと（『舊唐書』巻十四、憲宗紀）とを結びつけて、「建の　鄜（州）に在りし時、居易は已に翰林（院）に入れり。是れ今本の次第（配列順序）已に亂るる者の一なり」と指摘した。

朱金城「『白氏長慶集』人名箋證[20]」は、この岑仲勉の説と同じ考證をして、本詩を元和三年の作と推定する（朱『箋校』も同じ）。路恕の鄜州刺史・鄜坊節度使の在任期間は、元和三年二月から元和七年正月までの約四年間[21]におよぶが、①元稹の前掲「李公墓誌銘」の記載と、②元和四年の春三月、李建がすでに歸京していたことは、白詩「李十一と同に醉ひて元九（稹）を憶ふ」（巻14）の存在によって裏づけられること[22]、の二點を考えあわせると、朱金城の説は妥當であろう。

鄜州は、都長安のほぼ眞北約二〇〇キロの地（現在の陝西省富縣）である。本詩は、都長安の街東、修行坊にあった李建[23]（七六四～八二一、白居易より八歳年長）の邸宅（北宋の宋敏求『長安志』巻八、修行坊）内の、東亭の壁に書き題した、いわゆる題壁詩である。當時、李建は鄜坊節度使路恕の幕僚として、鄜州に滯在していた。つまり本詩は、當時、新昌坊に住んでいた白居易が、その西南方向、ほど近い彼の留守宅を訪れての作である。ちなみに、白居易・李建雙方の友人である元稹にも、元和元年（八〇六）の晩春の作[24]とされる「李十一（建）の修行里の居壁に題す」詩が傳わる。なお題壁詩については、羅宗濤「唐人題壁詩初探[25]」や、吳承學「論題壁詩[26]」など參照。

○〔相思〕　相は、動作の對象の存在を示唆する接頭語。從って「相思」とは、親友の李建をなつかしむ意。ちなみに、この「思」は動詞（平聲）、下句「蛬思」の思は名詞（仄聲〔去聲〕）である。

○〔夕〕　中國古典語の「夕」は、夕方をも含んだ、夜全體を指す。ここも夜景の美しさを表す「風月好し」の言葉（轉句）が見えることから、夜の意と考えてよい。

○〔松臺〕　柿村『考證』に「東亭に於ける松の植わる臺」とあるが、臺そのものの意味には言及しない。川口注は、臺を「土を方形に高くもりあげて、四方を見はらせるようにしたものみの臺。うてな。そこに松が植えてあった」とし、大曽根注や菅野注（菅野禮行譯注『和漢朗詠集』の略稱。以下、同じ）もほぼ同じである。この解釋は、書陵部本『朗詠抄』に、

「松臺トハ、可レ然處ニハ、花亭・松亭・竹院ナントト云テ、松臺トハ、壇ヲ少シツキ上テ、舞臺ナントノヤウニシテ、松ヲ植テ、愛スル也」（『六注』もほぼ同じ）とも通じあう。

しかし李建の邸宅のある修行坊が、長安城内で最も地勢の高い樂遊原（前漢の宣帝を祀る樂遊廟のあった昇平坊の東北隅を中心とした高原）の一角を占める（修行坊は昇平坊の南隣）ことを考えると、ここの臺は、土を盛りあげて造った見晴らし臺（人工的な基壇）ではなく、自然のままの高臺、言い換えれば樂遊原の一角を形成する、平らで高い臺地を意味していよう。この點は、樂遊原付近が都長安城内の月見の名所である點とともに、すでに前稿一五一番[27]の條に指摘した。この意味で岡村繁『白氏文集』三（竹村則行執筆）に、「松が生えた臺地」とあるのが妥當であろう。

本詩の七年後（元和十年）に成る白詩「李十一舍人（建）の松園にて小酎酒を飲む……」（卷15）に、「亂松の園裏　醉ひて相ひ憶ふ[28]」とある。この詩題中の「松園」、および詩中の「亂松の園」は、本詩の「松臺」と同じ場所を指す、と考えてよいだろう。

○〔蛬思〕　蛬は、那波本等に「蛩」に作るが、兩字は同意（宋版は蛬）。晉の崔豹『古今注』卷中、魚中第五に、「蟋蟀は、一名吟蛩、一名蛩。秋初に生じ、寒を得れば則ち鳴く」とあり、『爾雅』釋蟲は「蟋蟀は蛬」といい、その郭璞注に「今の促織なり」とある。つまり中國では、蟋蟀・促織・蛩・蛬は、いずれも秋の蟲を總稱した言葉、コオロギの類を指すと考えられる。古訓はキリギリス。ちなみに源順『倭名類聚抄』には、促織・蜻蛉・蟋蟀を分けて記すが、中國の古典では三者をほぼ同一視して、嚴密には區別しない[29]、といってよい。「蛬」はまた、朽ちた葦（の葉）の變化したものとも意識された（晉の干寶『搜神記』卷十二）。

蛩思の思は蟬聲と對をなして、悲しげな鳴き聲を指す。唐代の『趙志集』に收める詩[30]（「秋晩感時寄　裴草然」）にも、「天高月淨、鳥思蟲吟」とあり、思と吟とが對文（互文）同義をなして、「鳥思き蟲吟ず」と訓むこともできよう。書陵部本『朗詠抄』や『六注』、『假名注』などに、思を「音」と注し、『抄注』に「モノオモヘルコヱ」という。『集注』は、やや詳しくいう、「きりぎりすも思ふことありて鳴くらん故に、彼れが鳴く聲を推して蛬思といふ也[31]」と。

「思」のこうした特殊な用例は、『和漢朗詠集』三二八番、「霜草枯れなんとして蟲の思ひ苦なり、風枝いまだ定まらず鳥の栖むこと難し」（川口本の訓み）と見える「蟲の思ひ」と

も通じあう。この二句は、白居易の詩（「答夢得秋庭獨坐見贈」巻33。後集巻14）の頷聯「霜草欲枯蟲思苦、風枝未定鳥棲難」であり、書陵部本『朗詠抄』は「蟲思苦」を、「蟲ノ音ハ、アハレケニ鳴ク也」とし、『假名注』も「蟲ノ音モ哀レケニ鳴ク也」という。つまり「蟲思」は、「蟲の鳴く聲」（川口・大曽根譯）を意味する。また本詩の三年前に成る同じ白詩（「首夏同諸校正遊開元觀、因宿玩月」巻5）の「風は清し　新葉の影、鳥は思ふ[32]　殘花の枝」も同例であり、「鳥は思く」と訓んでもよい。

ところで哀切な鳴き聲を表す「思」は、「鳴」や「啼」の字、あるいは「聲」「音」の字とは異なって、深い哀愁をたたえた、陰影に富む詩語といえよう。おそらく悲傷・哀愁の意味から轉じた、新奇な引申義であろう。白居易の詩「秋思」（巻26、後集巻11）に、「雁思來天北、砧愁滿水南」とある。思と愁は對文同義で、それぞれ雁の鳴き聲と砧の音の哀切さを形容しており、筆者の推測を裏づける。ちなみに上句は、「雁思いて　天北より來る」とも訓じえよう。

哀切な鳴き聲を形容する「思」の用例は、すでに梁の簡文帝蕭綱「秋夜詩[33]」に、「螢飛夜的的、蟲思夕喓喓」と見える。的的は明るいさま、喓喓は蟲の鳴き聲を表す擬音語。下句は「蟲思いて　夕に喓喓たり」と訓むことができよう。蟲思を逆にした「思蟲」（悲しげに鳴く蟲）の語もある[34]。梁の柳惲「長門怨」（『玉臺新詠』巻5）に、「綺簷に清露潺ひ、網戸に思蟲吟ず」と見える。ただこの用例は、下に「吟ず」とあり、さらに「清露」の清と對をなすため、「思蟲」の思は「悲」とほぼ同意。逆にいえば、「悲鳴」を意味する思が「悲」の引申義であることを再確認させる用例ともいえよう。

さらに王維の「鄭州に宿す」詩にも、「蟲思機杼鳴、雀喧禾黍熟」とあり、思と喧とが類義語をなす。入谷仙介『王維[35]』は、「蟲思きて機杼鳴り、雀喧しくして禾黍熟す」と訓むが、思の訓「すだク」は、特に注目されてよい。『文苑英華』巻二九一（宋版）に、上句を「蟲鳴機杼休」に作る。思を「鳴く」に作る異文の存在も、こうした一連の考察を裏づけている。鄧安生・劉暢・楊永明『王維詩選譯[36]』に、上句を「蟋蟀歡鳴織機聲響」と譯するが、傍點部は「悲鳴」に改めるべきであろう。

○〔蟬聲〕　この蟬は、涼風の訪れとともに鳴き始める秋の蟬、いわゆる寒蟬・寒蜩・寒蜚を指す。ひぐらし・つくつく法師の類である。「秋風の中で、葉もすがれようとする喬木の梢に止まり、ただ清露をすすって悲鳴哀吟する」（松

原朗[37]）イメージを持ち、俗に「秋涼」とも稱され[38]、秋の寂寥感を深める。本稿一九四番[39]參照。

●菅野禮行『和漢朗詠集』譯注質疑

昨年（一九九九年）の十月、菅野禮行（すがのひろゆき）『和漢朗詠集』（小學館・新編日本古典文學全集19）が刊行された。これは、昭和期の川口、大曽根・堀内譯注に續くものであり、大きな期待をこめて讀み始めた。しかし少なくとも中國古典詩に對するその譯注は、筆者の發表した一連の注釋補訂稿のそれとは異なるところが多い。本稿以降、この菅野譯注本も補訂の對象に加えて檢討するが、既發表の條は、今回一括して、その譯注に對する質疑を試みて、研究者の批正をあおぎたく思う。詳しい考證は一連の拙稿にゆずり、ここではその結論のみを書き記しておきたい（單なる誤植は除く）。

●九番　元稹「樂天に寄す」　長慶四年（八二四）、作者四十六歳、越州での作。菅野本は、白居易の詩の場合、作成年代と作成場所を記すことが多いが、それ以外の詩人の場合には、ほとんど考證を缺く。しかし作詩の年代と場所が明瞭にわかる場合には、上述のごとく簡略にでも記すべきであろう。

●十番　白居易「潯陽の春」「續教啼鳥説來由」　啼鳥は、單に「小鳥の鳴き聲」でよく、「鶯の美しい鳴き聲」に特定することはできない。

●十八番　白居易「哥舒大（かじょだい）が贈らるるに酬ゆ」　「紹興本『文集』卷十三には題下に『去年哥舒翰ら八人……』の自注がある」として、哥舒大は哥舒翰を指すとする。しかし紹興本（宋版）には翰の字はなく、哥舒大（大は排行第一）の名は、じつは恆である。

●十九番　劉禹錫「春日　懷ひを書し……」「遊絲繚亂碧羅天」　遊絲を「かげろう」の意とし、「一説に、クモの子が絲を引いて飛ぶのをいう」と指摘するが、中國の古典詩では、この「一説」こそ、まず第一にあげるべき意味である。たとえば羅竹風主編『漢語大詞典』10には、「かげろう」の意味をあげていない。

●四五番　元稹「襄陽樓に過りて府主の嚴司空に呈上す……」

詩題を「上府主嚴司空に呈す」と訓むのは誤り。「府主」とは唐代、節度使や觀察使を指す言葉。また「呈上」で一つの熟語（連文）をなし、「上府主」ではない。ちなみに嚴司空とは、嚴綬を指す。上句「拂水柳花千萬點」は、「暮春の心」（菅野注）を詠んだものであり、柳花は白い柳絮を指す。從って「柳の花。春に黄色い穂の形をして葉の間に出る」と

注するのは、晩春の柳絮を早春の黄色い柳花と混同した誤りである。注に引く白詩に「春風を尋ね逐ひて柳花を捉へん」とあるのも、柳絮である。ところで柳絮のイメージは、ほとんどすべて動的である。ここも「水面に低く垂れている柳の枝は數えきれないほどの花をつけている」情景ではなく、「無數の白い柳絮が水面をかすめ飛ぶ」動的な風景の描寫であろう。ちなみに、柳花と柳絮は、平仄の關係からしばしば混用される。

●五一番　白居易「皇甫賓客に酬ゆ」　皇甫賓客は「皇甫湜」ではなく、皇甫鏞を指そう。また「花亭我醉送殘春」の花亭は、「花の咲いているあずまや。……庭園内にある休憩のための小さな家」ではなく、對をなす「竹院」を「竹を栽えてある屋敷」と注するように、ここでは花の咲く白居易の履道里の自宅そのものを指している。後出の一六八番も參照。また「殘春」を「殘り少ない春の日」と譯すのは不適切。ある種の痛ましさをこめつつ、「衰殘する春、くずれゆく春」と譯すべきであろう。一七五番の「殘花」も、「散り殘った花」と譯すが、これも「盛りをすぎて生氣を失い、傷みしおれた花」を意味する。

●七五番　白居易「早春　蘇州を憶ひて……」「霞光曙後殷於火、草色晴來嬾似煙」　於と似が對文（互文）同義をなすこと、一〇四番の「巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉」と同例である。後者の「紅似粉」を「粉よりも紅なり」と訓む以上、本例も「嬾うして煙に似たり」ではなく、「煙よりも嬾し」（川口注本）と訓むべきであろう。こうした比較を表す「似」は、白話的用法である。なお嬾の字は「嫩」にも作る。この點について、

「嬾」（ものうし）と「嫩」（わかし）とは別字なので、いま底本に從い、訓みは岩波文庫本に據る。ただし『集註』に「嬾」を「ものうくして」と訓むも「わかきをいふ也」と注するのは不審。

と述べ、下句を「雨後の若草がもやもやとして、けだるげなのをいう」と說明する。

しかし唐代の寫本では、嫩を嬾と混用する。この現象は、日本でもほぼ同じである。中澤希男「冠註文筆眼心抄補正」[40]には、嫩を嬾に誤る例を二つ指摘する[41]。つまりこの場合、嬾の字は明らかに「嫩」の誤りであり、「けだるけな」樣子ではなく、萌えでた淺黄色の若草が一面にうちけむって、煙よりもやわらかで淡いことをいう。

●八一番　錢起「闕下の裴舍人に贈る」「長樂鐘聲花外盡、

龍池柳色雨中深」　長樂は「漢、高祖七年（二〇〇）二月、長安に都して建てた宮殿（史記・高祖本紀）」とするが、じつは秦の離宮「興樂宮」を改築して長樂宮と命名したもの。本例は「借りて唐宮を喩」えた用例であり、菅野注はこの指摘を缺く。また龍池は、確かに玄宗が住んだ興慶宮内のそれと考えてよいが、「長樂」と對をなすことを考えると、その連想を伴いつつも、やはり宮中の池を廣く指すのであろう。

●八七番　白居易「春至る」「黄梢新柳出城墻」　黄梢を「若芽のもえ出た梢」と注するのは不適切。早春、穂形の黄色い花につつまれた柳の梢（こずえ）を指す。前掲の四五番參照。

●一〇二番　白居易「天宮閣の早春」「墻柳誰家曝麴塵」　麴塵を「麴のかび。また、その黄緑色」と注するのも、やや不適切。日本の麴の色はコウジカビによる黄緑色を呈するが、中國のそれはケカビによる黄色である（篠田統の説）。

●一〇五番　白居易「峽中の石上に題す」「誠知老去風情少、見此爭無一句詩」　二句は「巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉」を受けた表現であり、風情は「風流を感じる心」では不充分。筆者の舊稿「ものごとに對する感動・關心・興味など」も、同じく不充分であり、この紙面を借りて「ここでは、特に女性に對するそれを指す」の言葉をつけ加えておきたい。この點、高木正一『白居易』下の「うわき心」、岡村繁『白氏文集』三（竹村則行執筆）に「色氣、當時の俗語」とするのが妥當であろう。

●一一四番　白居易「早春　張賓客を招く」「花光焰焰火燒春」　焰焰（えんえん）（燄燄と同意）を「燃え始めた火が次々と廣がるさま。……諸注、火が盛んに燃えるさまと解するが、從わない」と注する。確かに焰焰には「火苗初起貌」（『漢語大詞典』七）の意味もあるが、同時にまた「火焰熾烈貌」（同上書）をも意味する。白詩「落花」の「桃飄りて火燄燄」、同「風は火焰を翻（ひるが）へして人を燒かんと欲す」など、いずれも紅い花の燃えたつさまを、盛んに燃える燄（ほのお）にたとえたものであり、通説のほうがよい。また「桃や李（すもも）の花が次々と咲き亂れて……」と譯するが、李は白い花であり、やや不注意。なお詩題の張賓客の名、仲方も記したほうがよい。

●一二七番　白居易「春來（きた）りて頻りに李（ママ）二賓客と郭外に同遊す……」「『佳句』遊放部・春遊に『白　春來たって李、郭外と同遊す』として出」と注する（原文は「春來與李郭外同遊」）。しかし傍點部は「李と郭外に」の誤り。郭外とは洛陽城外を指す。ちなみに、嘉禎本「李二、二十二賓客」と『文集』「李二、賓客」の異同を記しながら、單に「『李二』の『二』は排行」

とのみ記すのも不親切。『文集』の「李二賓客」は「李廿二賓客」[42]の奪文で、李仍叔を指すと考えるべきであろう。

●一三三番　白居易「元員外の　三月三十日……」　元員外（元八）を、柿村『考證』の説に従って「元九」（元稹）を指すとするが、従いがたい。同じ年に成る白詩「書に代ふ」に「金部元八員外」と見える人物、金部員外郎の元宗簡を指す（朱『箋校』）。丸山茂「白氏交遊錄—元宗簡」（補注1）も參照。

●一三七番　白居易「元十八の溪居に題す」「秋房初結白芙蓉」　秋房を「秋に咲く花」と注するのは誤り。この房は「蓮房」（補注2）（落花後の、蓮の實を含む蜂の巣狀の外包（うてん）〔花托〕、轉じて蓮の實）を意味し、決して「ハナブサ」の意味ではない。從ってその譯「秋の花である白い蓮華（れんげ）の花」云々も誤り。蓮の花は、色の紅白に關係なく、一般に夏に咲く水花と見なされる。

●一四四番　白居易「早夏　曉に興（お）き……」「背壁燈殘經宿焰」「背壁燈」を「壁に背を向け室内を明るくするようにした燈。『背燭』の對」と注する。しかしこれは、うすぼんやりしたあかりの中で寢につく、中晩唐期の爛熟した都市文化（村上哲見の説、本詩は洛陽での作）を考えると、理解しがたい。要するにこの場合も、ⓐ燈の光を壁の方に向けて暗くする、もしくはⓑ燈を壁の背後に移してほの暗くする、のどちらかに解釋すべきであろう。拙稿二七番も參照。

●一四七番　白居易「薔薇正に開き……」「甕頭竹葉經春熟、階底薔薇入夏開」「甕頭」を「初めて熟した酒の名」と注し、古來の訓み「甕（もたい）の頭（ほとり）の竹葉は……」を「甕頭（をうとう）　竹葉……」に改めて、「甕頭とか竹葉などといわれる酒が、……」と譯す。しかし「甕頭竹葉」は、對をなす「階底の薔薇」と關連させて考えると、この新説には從いがたい。甕頭には確かに「初めて熟せし酒」の意味があるが、それはあくまでも第二義にすぎず、「甕（かめ）の頭（なほ）の竹葉（酒）」を意味することは搖るがない。

●一五一番　白居易「七言十二句……」「月照松時臺上行」　この臺は「高殿」ではなく、當時、白居易が住んでいた新昌坊内の高臺、いいかえれば新昌坊内の自宅が長安城内で最も地勢の高い樂遊原の一角を占めたための、平らで高い臺地の意味、と考えるべきであろう。

●一五九番　白居易「池上に涼を逐ふ」「開成元年（八三六）、六十五歳、洛陽での作。當時作者は龍門山の東にある香山（こうざん）の麓に住居を定め、閑靜な生活を送っていた」とあり、洛陽の南部、龍門での作と考えるようである。しかしこの詩も、洛陽城内の履道里の自宅での作であろう。

●一六一番　白居易「熱きに苦しんで……」「但能心靜卽身涼」「ただ禪師の心が悟りを開いて靜かであるので……」と譯すが、「但…卽」はほぼ現代中國語の「只要…就」と對應する表現であり、「もしも雜念をなくして心を平靜に保つことができさえすれば」の意。いいかえれば本句は、猛暑をよそに平然と座禪する禪師に對する直接の賞讃というよりは、それを踏まえたうえでの、より普遍的な眞理を說く一種の悟道詩的表現である。ちなみに、上句「不是禪房無熱到」の不是は、『文集』には「可是」に作る。この異文を指摘する以上、その「可」は「豈」（疑問〔推測〕・反語）を意味する俗語的用法であることも、當然觸れておくべきであろう。

●一六八番　白居易「楊尙書の『相を罷めし後、夏日　永安の水亭に遊び、兼ねて本曹の楊侍郎を招いて同に行く』に和す」「『文集』の題によれば、楊尙書の庭園內の水亭に遊んだ時のものである」とするが、從いがたい。本詩は洛陽での作であるが、詩題中の「永安の水亭」とは、都長安城內の西南部、永安坊にあった楊嗣復の別邸・別莊を指す。つまり本詩は、吏部尙書楊嗣復の詩に唱和した作品にすぎず、このとき彼の別邸に直接遊んでの作ではない。なお「庭園內の水亭」という表現も不適切。この亭は、園亭をそなえた亭館・別邸を意味する廣義の用法である。また楊侍郎は白居易の妻の兄、楊汝士を指す。最低限の人名の注記は、やはり必要であろう。

●一七一番　白居易「西湖より晩に歸りて……」「錢塘湖（西湖）から夕方に歸ってきてその邊りにある孤山寺を顧望した時の勝景を歌ったもの」とするが、不適切。本詩は、錢塘湖（西湖）中の孤山寺（湖中の西北部にそびえたつ島「孤山」にある永福寺の通稱）の法會？に參加して（あるいは單に孤山寺に遊んで）、夕暮れに歸る途中の勝景を歌った作品である。

●一七六番　白居易「階下の蓮」「葉展影翻當砌月」　砌を「建物に上る階段下の石疊」と注するが、この砌は石段・石階の意で、「階」の類義語。ただし階は平聲、砌は仄聲である。

●一八二番　許渾「楞伽寺より、晨に起きて舟を汎かべ……」「一聲山鳥曙雲外、萬點水螢秋草中」「晩夏の曉の風情をうたったもの。晩夏の早朝にはすでに秋の氣配が漂うので『秋草』と表現している」と述べるが、これは『和漢朗詠集』の分類（夏の部）にあわせた曲解であろう。本詩は秋の作であり、『千載佳句』も早秋の項に收める。中國の古典詩では、螢は秋の夜の風物として歌われることが多いので、「秋草」

とも矛盾しない。

また上句「山鳥」を、「ここでは、ほととぎす」とするが、不適切。中國の杜鵑は、おおむね晩春の鳥として表現され、本詩の山鳥は、單なる「山の鳥」にすぎない。おそらく編者の藤原公任は、この誤差を充分知りつつも、「和漢の詩歌の竝列」という基本原則を守るために、和歌の郭公のイメージにあう佳句（山ほととぎすの語もある）を、あえて選んだのであろう（奥村郁子の説）。從ってこの條は、「本來、山の鳥を意味するが、ここでは、ほととぎすに見立てて選びとったもの」などと説明すべきであろう。詩題の楞伽寺が蘇州の名刹であることも、注記したほうがよい。たとえ「幽居を發して將に同志（友人の意。引用者注）を尋ねんとす」（嘉禎本）の詩題に從っても、二句は旅の途中での見聞を詠んだものであり、「一聲鳴くほととぎすを求めては、夜が明けるころの雲の彼方に尋ねゆく。たくさん飛び交う水邊の螢を求めては、秋の草むらを分けてゆく」と譯すことは無理であろう。

●一八六番　元稹「夜坐す」「螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長」　辰星を「水星（柿村説）」と注し、柿村『考證』の説を長々と引くが、誤り。この辰星は、夏の代表的な星座の一つ、蝎座のなかの、ひときわ紅く光る一等星「アンタレス」、漢語では「火・大火」の別稱である。夏の南の夕空に高く輝いていた大きな紅い星「大火」の位置が、秋が近づくにつれて移動し、西の空に低く垂れるようになったため、眠れぬときなどには、早々と沈んで見えなくなるのであろう。福島久雄『孔子の見た星座―古典詩文の星を讀む』[43]も、筆者と同じ「大火」説を採り、「水星」説に對して、こう批判する、「水星といえば、惑星である。その運動は、季節とあまりかかわりがない。その上、水星という惑星は、太陽に最も近い惑星で、東西の空に出沒するが、高度が低く、見える期間はあまりない」と。要するに下句は、『詩經』豳風「七月」詩以來の、西空に低く輝く「大火」の位置によって秋の到來を知る、という傳統的な發想にもとづいた表現、と考えるべきであろう。

●一八七番　許渾「常州にて楊給事に留與す」　『佳句』四時部・秋興『許渾　陽給事に上る』」と注する以上、陽は楊字の誤りであることを指摘すべきであろう。また楊給事が門下省給事中から常州刺史に轉出した楊虞卿を指すことがわかれば、本詩が大和七～八年（八三三―四）の作であることも明白になる。特にこの二句が逸句であることを考えれば、こうした考證も時には試みて、注釋を一歩前進させるべきで

あろう。

●一九二番　白居易「驪宮高し」「玉甃暖兮溫泉溢」　玉甃を「玉を敷き詰めた石だたみ」と注し、「華清宮の玉の石疊」と譯するが、やや不適切。ここは、浴池の壁面のタイルの類をいう。

●一九三番　李嘉祐？「青泥店を發して長安縣に至り、西のかた江を渡る」　この條も逸句であるが、菅野本は種々傳わる詩題を單に列擧するだけで、誤字等に對する言及を缺く。青泥店は青涯店・青滋店にも作るが、青泥店が正しい。それは、都長安付近から漢中や蜀へと向かう、秦嶺山脈越えの主要な驛道上に置かれた青泥驛の邸店を指し、長安縣は長擧縣の誤りである（嚴耕望の說）。この興州長擧縣には、雲雨が多いために青い泥の嶺と名づけられた「青泥嶺」（秦嶺山脈中の一峰）があった。上句「千峰鳥路含梅雨」は、こうした特異な風土――そそりたつ峰々の險しい山道は、梅雨どきの降りやまぬ雨水をたっぷり吸いこんで、一面にぬかるんで歩きにくいことを詠み、「多くの峰々の鳥の通い路は梅雨を含んだ雲に一面に阻まれ」の意味ではなかろう。本句の「鳥路」は、單に「鳥の通い路」と譯しただけでは、意味が明瞭ではない。いいかえれば、この鳥路は、わずかに鳥だけが通過できるような、細く險しい山道を誇張した言葉である。菅原本を含めた從來の解釋は、青泥店の位置と、その名稱の由來（青泥）が未詳であったために、適切な譯に到りえなかったのであろう。險峻な蜀道の途中にあって、「懸崖萬仞、山には雲雨多く、行く者屢ば泥淖に逢ふ」（『元和郡縣圖志』）という青泥嶺の特色を詠みこんだ句、と考えるべきであろう。

●一九九番　白居易「白羽扇」「引秋生手裏、藏月入懷中」「秋ともなると、扇はいちはやく涼しい風を手の中に生ぜしめて、圓い月に似た扇は、人の懷の中にしまいこまれる」という譯は、疑問。この二句は、秋の訪れとともに不要になる扇の運命を歌うものではなく、秋の涼しさを生み、懷の中にも收められる白羽扇の長所や特徵を歌ったものにすぎないであろう。從來の通說のほうがまさる。

●二〇四番　白居易「立秋の日　樂遊園に登る」「蕭颯涼風與悴鬢」　蕭颯を「もの寂しい秋風の形容」とするが、本詩の蕭颯は、涼風だけでなく、衰鬢をも形容する言葉であろう。また悴鬢を「やつれ衰えた鬢の毛。『衰鬢』に同じ」とするが、疑問。「悴容」「悴顏」などとはいうが、悴鬢の用例は未見。本來の衰鬢を「悴鬢」に改變した背景には、音調律（平仄）の問題が存在するようである。

●二〇九番　白居易「祕書の後廳」「作者はこの時（大和元年、五十六歳）、洛陽にあって祕書監の職にあった」とするのは、單純な誤り。この時、白居易は都長安に召還されて祕書監になったのである。

●二一二番　白居易「七夕」「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多」　乞巧を「陰暦七月七日の夜、子供たちが牽牛・織女の二星を祭り、文筆や裁縫の上達を祈る行事（荊楚歳時記）」と注するが、不正確。文筆上達のことは、『荊楚歳時記』のなかには見えない。乞巧節は本來、女性たちの祭りであったが、唐代の半ば以降、兒童（男の子も女の子も）が參加しはじめた。この結果、乞巧節は婦女の手藝の上達から、男の子は學問、女の子は手藝の上達を祈る行事へと、その重點が移っていく。

また下句に對して、「裁縫が上手になるようになどの願いをこめて梶の葉などに書き、針に通した五色の絲を竹竿の先にかけたりすること」と注するが、梶の葉云々は日本での風習であり、少なくとも唐代の中國にはない。「願絲」とは、本來、桑蠶・機織りの神、織女星に供薦された綵絲に由來するらしく、柳宗元の「乞巧文」に見える「竹を插して綏（飾りひも）を垂る」の句こそ、「竹竿……」の句の實態を描寫するもの、と見なしてよいだろう。ちなみに、『荊楚歳時記』中の「穿七孔鍼」は、「七つの孔に鍼を穿ち」ではなく、「七孔鍼（七本の鍼。孔は量詞）に穿ち」と訓むべきである。

●二二一番　白居易「王十八の……仙遊寺に寄題す」　この寄題は、「その地に行かずに題詠すること」ではなく、遠方から詩を人に託して寄り、題きつけてもらう意である。仙遊寺についても、やはり簡略な注がほしい。

●二二二番　白居易「盧侍御と崔評事と……」「楚思眇茫雲水冷、商聲清脆管弦秋」　この「楚思」は「楚（湖北・湖南省一帶）の地でのもの思い」では不充分。「いわれなき處罰を受けて楚の地を左遷されてゆく私の憂思」を意味する。これは、讒言されて都を追放された楚客屈原に、わが身の境遇をなぞらえたもの。菅野注は、引用する『集註』を充分理解していない。また「商聲」を「秋風や蟲などの聲」とする注も不充分。ここでは單に「秋聲」（商の悲しい聲）だけでなく、淒涼・悲壯な調べをもつとされる「商調」の意も兼ねている。さらに「清脆」を「清んで柔らかな聲の形容」と注するが、傍點部は不適切。おそらく「脆い」という訓に引きずられた結果であろうが、脆は「すっきりと齒切れのよい」意。つまり清脆は一種の類義語として、音聲が冴えて響くことをいう。

ちなみに、菅野注は、眇茫・清脆をそれぞれ上の二字「楚思」「商聲」の述語としてしか捉えていない。しかしここは、前句の述語が後句の副詞を兼ねる、廣義の兼語式をなす特殊な表現である。つまり、「楚思眇茫たり」と「眇茫として雲水冷じ」、「商聲清脆たり」と「清脆として管弦秋なり」の二意を表したもの、と捉えるべきであろう。

注

（1）アーサー・ウェーリー『白樂天』（花房英樹譯）第六章參照。なお下邽退居期を詳述した專論に、芳村弘道「白居易の下邽退居」（『學林』十八號、一九九二年）がある。

（2）京都府立大學學術報告『人文』三十六號、一九八四年所收。

（3）日本放送出版協會、一九八九年。

（4）本詩とほぼ同時期の白氏の作に、「悟眞寺（藍田縣東南の王順山中の寺）に遊ぶ詩」（卷六）がある。

（5）『陝西省地圖冊』（西安地圖出版社、一九八七年）渭南市の條參照。

（6）太田次男『白樂天』（集英社、一九八三年）に、「京兆府の西、渭水の南岸に沿った地」（一三一頁）とするのは誤り。

（7）小學館・新編日本古典文學全集19、一九九九年。

（8）書陵部本『私注』參照。

『和漢朗詠集』所收注釋補訂（十二）（植木）

（9）朋友書店、一九八一年影印。二八六頁。

（10）江藍生・曹廣順編著『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七年）も同じ。

（11）清の倪璠『庾子山集注』卷四所收。

（12）小樽商科大學『人文研究』六十八輯、一九八四年所收。

（13）同『詩語の諸相—唐詩ノート—』（研文出版、一九八一年）所收。增訂版（一九九五年）が便利である。

（14）平野彦二郎『漢詩概說』（武藏野書院、一九五一年）。菅野禮行『和漢朗詠集』も、「秋という時節」の意とする。

（15）尾崎雄二郎ほか編『漢語史の諸問題』（京都大學人文科學研究所、一九八八年）所收。

（16）岑仲勉『唐人行第錄（外三種）』參照。

（17）『中央研究院歷史語言研究所集刊』第九本、一九四七年所收。のち『岑仲勉史學論文集』（中華書局、一九九〇年）に再錄。

（18）中華書局、一九八二年。

（19）岑仲勉・朱金城が引用する文章の句讀と文字には問題があるので、冀勤點校本による。また論旨の展開上、長めに引く。

（20）『中華文史論叢』一九七九年第一期所收。のち同『白居易研究』（陝西人民出版社、一九八七年）に再錄。

（21）吳廷燮『唐方鎭年表』卷一や、郁賢皓『唐刺史考』（1）、卷七など參照。

（22）花房英樹「白居易年譜」（同『白居易研究』所收）や、羅

聯添『白樂天年譜』など參照。

(23)『舊唐書』卷一五五、『新唐書』卷一六二、堤留吉『白樂天研究』(春秋社、一九六九年)第六章(一五八頁以下)、朱金城「『白氏長慶集』人名箋證」(前掲)など參照。

(24)花房・前川『元稹研究』所收の「年譜」による。卞孝萱『元稹年譜』は、貞元十九年(八〇三)～永貞元年(八〇五)、祕書省校書郎在任時の作とする。

(25)『中華文史論叢』第四十七輯、一九九一年所收。

(26)『文學遺産』一九九四年第四期所收。

(27)『中國詩文論叢』第十集、一九九一年所收。その條に李建の住む場所を「修業坊」と記すが、これは修行坊の誤植。

(28)仕事のために來られない元宗簡のことを思いやる意。

(29)狩谷棭齋『箋注倭名類聚抄』卷八に、「促織・蜻蛚・蟋蟀、皆可訓岐利岐利須。……古保呂岐亦岐利岐利須之一種耳」とある(返り點省略)。

(30)陳尚君『全唐詩續拾』卷五五(『全唐詩補編』下)所收。

(31)岡村繁『白氏文集』三には、「思は悲しみのことか。蟬聲の聲と互文」と注する。

(32)「思」の字は宋版による。那波本等は「戀」に作る。「鳥思」の語は、より古く南齊の王延「別蕭諮議詩」に「年深北岫時、鳥思南國園」とあり、梁の江淹「悼室人詩十首」其一に「蕙弱芳未空、蘭深鳥思時」などとある。

(33)『藝文類聚』卷三、歳時上、秋。

(34)陸機「從兄の車騎(將軍陸士光)に贈る」詩(『文選』卷二四)に、「思鳥有悲音」という類似した表現もある。

(35)筑摩書房、中國詩文選、一九七三年。

(36)巴蜀書社、一九九〇年。

(37)松浦友久編著『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年)六六八頁參照。

(38)郝懿行『爾雅義疏』下之三、釋蟲の條參照。

(39)『中國詩文論叢』第十四集、一九九五年所收。

(40)『群馬大學紀要』(人文社會科學編)二一號、一九七二年。

(41)中澤希男「文鏡祕府論校勘記」二(『群馬大學紀要　人文科學篇』第十四卷一號、一九六五年)にも、嫩を嬾に誤る例を指摘する。わが『經國集』のなかにも同じ例のあること、小島憲之『國風暗黒時代の文學中(下)I』(塙書房、一九八五年。二二三六～七頁)參照。なお本條、および本文に引く中澤論文は、舊稿のなかではまだ指摘していない。

(42)內閣文庫所藏『管見抄』第十冊にも、「李廿二賓客」に作る。資料を補っておく。

(43)大修館書店、一九九七年。

(補注1)日本大學文理學部人文科學研究所『研究紀要』第五六號、一九九八年所收。

(補注2)岡村繁『白氏文集』三も、筆者と同意見。